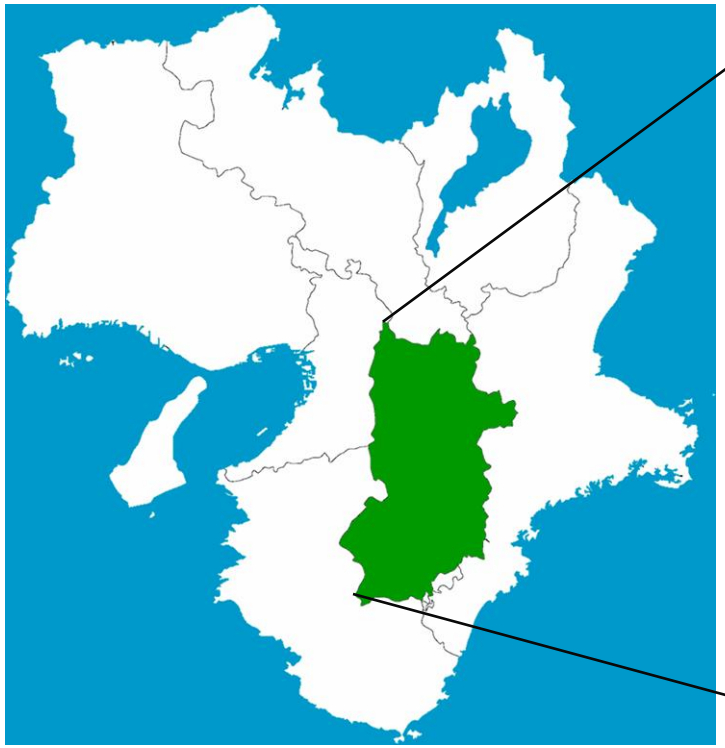
資料３-２

SDGsに貢献できる温泉郷を目指して
地域循環共生圏
「十津川村ゼロカーボンカントリー」構想へ

2025.03.04

奈良県十津川村
企画観光課　玉置　雄一郎

十津川村の位置

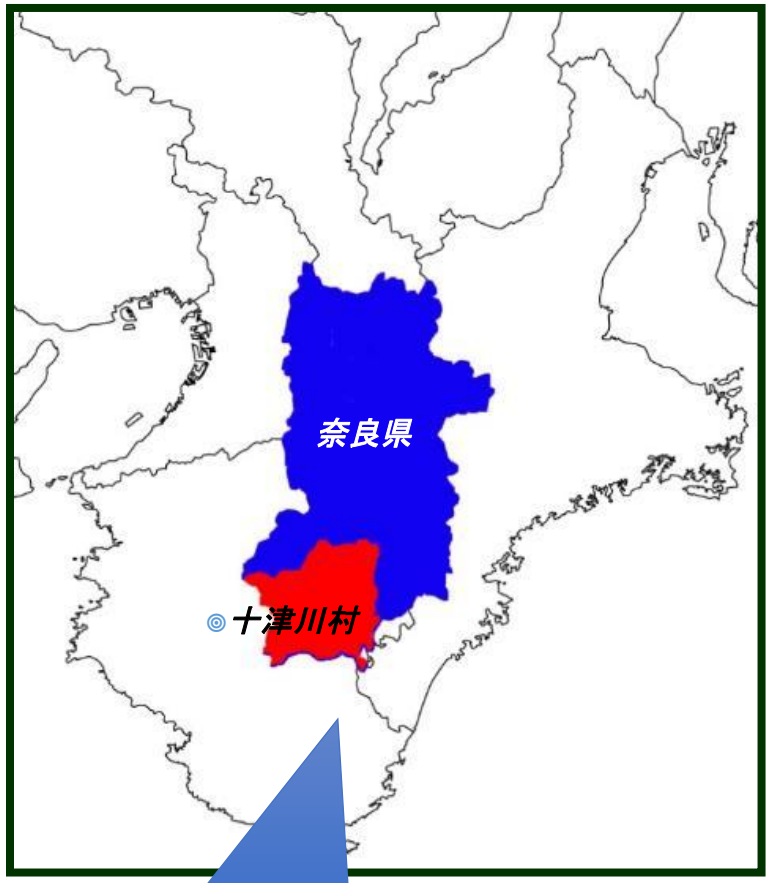


☆紀伊半島の中央、奈良県の最南端に位置

☆総面積６７２km²（奈良県の５分の１）

→東京２３区、琵琶湖、淡路島より大きい！

【十津川村の概要】



紀伊半島のほぼ中央。
奈良県の最南端

- 面積　672.38km^2
- 奈良県の5分の1　日本一広い村
- 琵琶湖や淡路島よりも大きい
- 村の96％が森林
- 急峻な地形の緩やかな部分に
  ２００以上の集落が点在
- 過疎・少子高齢化が進んでいる

十津川村の風景

十津川村の風景

十津川村の風景

【十津川村の観光資源（世界遺産の道）】

【十津川村の観光資源（源泉かけ流しの温泉）】

コンシェルジュ事業について

●応募の背景・経緯

SDGsに貢献できる温泉郷を目指したいが、温泉熱有効活用に向けた展開・導入検討の方法が分からない！

●事業の成果

令和4年度（支援初年度）

①温泉が保有する熱量「温泉熱ポテンシャル」を知り、温泉という資源の新たな価値を見いだせた。

②温泉熱の有効活用によって持続可能な脱炭素地域づくりが推進出来うることを見いだせた。

③温泉熱有効活用に向けたソフト・ハード両面の国等支援事業の概要を知り、温泉熱を熱交換し給湯する仕組みを備えた公衆浴場の統合施設整備に向けた構想が持てた。

④その構想を基として、ソフト・ハード面の事業構想を、令和4年12月に環境大臣要望として提出できた。

コンシェルジュ事業について

●事業の成果

令和5年度（支援2年目）

①現在の公衆浴場の再編、温泉熱を活用した統合温浴施設の整備に向けて、具体な動きへとつながってきた。

②温泉供給設備（温泉引湯管）の高効率化改修について、村の温泉環境に最適な導入方法、整備イメージ、スケジュール感など、具体的な構想をもつことができた。

令和6年度（支援3年目）

①統合温浴施設基本構想等策定業務を事業化し、基本構想、基本計画の策定を行う中、統合温浴施設にマッチした温泉熱活用の方法、適切な設備など、アドバイスを頂く方法で、コンシェルジュ事業を展開頂けた。

②統合温浴施設とセットで、配湯管の高効率化改修の検討を進めるにあたり、その事業化工程の考え方のアドバイスを頂き、国の交付金や補助金の活用についても、イメージを持てるに至った。

事業の動機・原因・目的等
公衆浴場本来の目的や経営状況、施設の老朽化状況を鑑み、各温泉地で一つの施設に統合する方針を固め、湯泉地温泉では「泉湯・滝の湯」を統合、十津川温泉では「庵の湯、星の湯、南部老人憩いの家浴場」を統合する構想を打ち出したい。 また、統合温浴施設の整備により、慢性的な赤字状態にある公衆浴場事業の抜本的な見直しを行い、村外入浴料金の値上改定と指定管理料の支出削減によって、収支バランスを健全化し、ひいては公衆浴場事業の黒字化への転換を図りたい。 その統合温浴施設の整備構想は、村民が「憩いを感じる場所づくり」や「にぎわい拠点の創出」と位置づけ、村民が豊かに暮らせる村づくりの重点施策として、事業展開を図りたい。

政策等実施による効果（見込）
▽統合温浴施設整備という先行投資によって、設備の充実や施設の高付加価値化を図り、入浴料金の値上改定による経常的な収入増を見込む。かつ、施設統合による指定管理料の支出削減によって、将来、公衆浴場事業の収支赤字解消を見込む。 ▽統合温浴施設の整備によって、「憩いを感じる場所」の創出を図り、村民が豊かに暮らせる村づくりに資する。

●事業概要（R6年度）

【統合温浴施設基本構想策定業務】

『基本構想』

1. 現施設の課題を整理し、施設統合の必要性、基本理念、基本方針、建設場所や規模の考え方を整理する。
2. 統合施設の具体な機能、設備、規模等を整理する。

各温泉地で一つの施設に統合する構想

泉湯

滝の湯

「統合温浴施設のイメージ例」
サウナや家族風呂といった多様な施設を兼ね備え、浴場以外にも、憩いのエリアとして、くつろげる設備や飲食提供スペースも有する。

ご清聴
ありがとうございました